

来・ぶらり



国宝 類聚古集（龍谷大学図書館所蔵）

図書館と私

戸上 宗賢

図書館と私のおつき合いは随分長いように思う。高校生の頃、生徒館員としてまるでクラブ活動のように毎日顔を出して仕事もしていた。恥ずかしながら日本十進分類法を学んだのもその頃である。大学に入ってから、講義の合間やあとに行くところといえば図書館しかなかったから、おのずと足が向いた。卒業論文を書く半年前からは開架式の、専門書の閲覧室に入り浸りであった。副手の人や先輩からもそこで色々とお話を教わったなつかしい記憶がある。

経済学部の創設準備のときは選書や分類などの仕事も手伝ったし、その後も何かとかわりが深まるばかりであった。『知の技法』がベストセラーになったけれども、自分なりの知の技法を身につけるためにはやはり図書館通いは欠かせぬものだと思う。昨今の学生諸氏に昔話をしたところでどうということもなからうが、若い血潮のたぎる時代に、静かに図書館で書物に親しむ時間を充分に持つて頂くことが肝要ではないか、と思うのである。

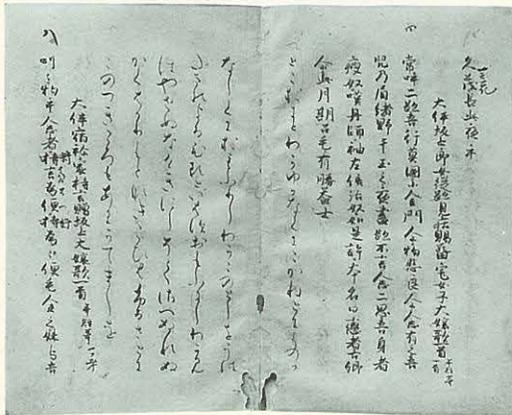
私は私で我流に今後も末長く図書館とつき合って、できれば息絶えるまで続けたいとねがっている。
(経営学部長)

目次

図書館と私 経営学部長 戸上 宗賢	1
貴重書紹介 国宝 類聚古集 秋本 守英	2
大谷探検隊収集古紙片のCD-ROM化 温故知新 岡田 至弘	4
R君瀬田図書館に行く！	6
資格試験(公認会計士・税理士他)受験者の図書館利用のすすめ	8

国宝 類聚古集

秋本 守英



天下の孤本『類聚古集』 龍谷大学図書館蔵の『類聚古集』は、編者・藤原敦隆(1120没)自身が書いた本(これは残されていない)を、成立から間もない時期に直接書き写したもので、『類聚古集』の写本は、これ以外に全くない。この本をもとに抜き書きした『古葉略類聚抄』などのあることは、『類聚古集』が後世に重んじられていたことを示す。また、これらによって、二十巻のうち缺けている四つの巻の内容のあらましも知ることができる。

『万葉集』の再構成 「類聚」とは、種類別に聚める意で、雑纂(一定の配列法のない編集法)や作者別などに対比するという、書物の編纂方法の一つ、「古集」とは、平安時代後期からみて古い歌集である『万葉集』をいう。つまり、『類聚古集』は、雑纂形態である『万葉集』に収められたすべての歌を、種類別に編集し直した歌集である。『類聚』という名を持つ本には、奈良時代に山上憶良の撰んだ『類聚歌林』や、平安時代前期に成った百科事典『和名類聚抄』などがすでにあり、中国・唐の類書『藝文類聚』などに学んだものと考えられる。

『類聚古集』の分類は、大きくは長歌・短歌・旋頭歌という歌体別に、そのそれぞれは春・夏・秋・冬・天・地・山・水……に、春部はさらに霞・残雪・子日・さわらび・若菜……というように歌の題材別になっている。

『万葉集』本文の校勘とその訓み方 歌の一つ一つは、始めに万葉仮名で書き、その左に平仮名で訓み方を記している。よく知られている『万葉集』巻八の志貴皇子の歌は、『類聚古集』では、巻一・春部の「左和良妣」のところに、

石灑垂見之上乃左和良妣乃毛要出春尔成
来鴨

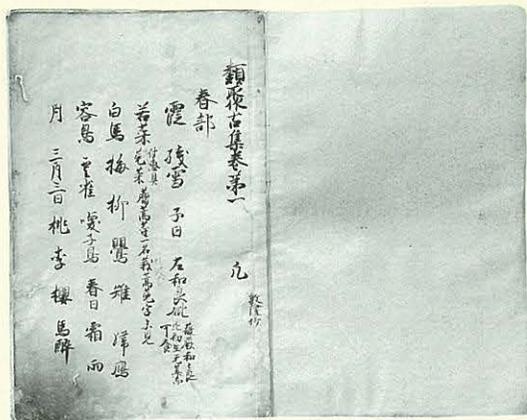
いはそゝくたるみのうへのさはらひのも
えいつるはるになりけるかも

とあり、「さはらひ」の「は」は見せ消ちにして右側に「わ」と訂正している。

「石灑」が『万葉集』では「石激」となっているが、平安時代の漢籍で「灑」と「激」とは同じ訓を持っていた。もし『類聚古集』が用いた『万葉集』も「灑」であったとすると、『万葉集』の本文が元来どうであったかという問題に一石を投じることになる。「さわら

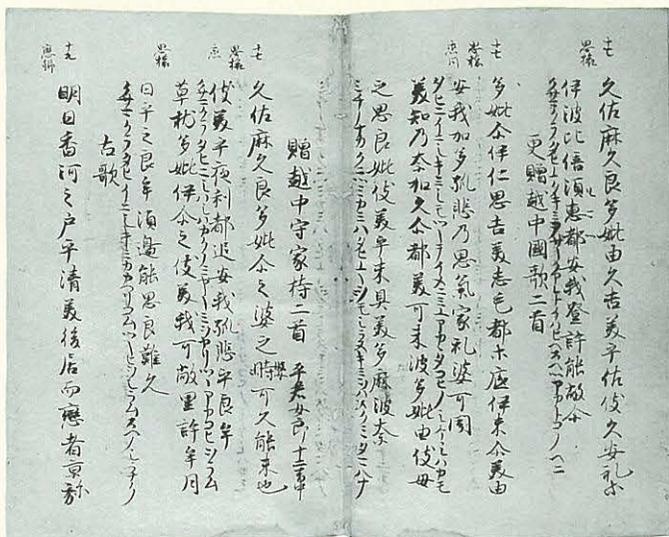
び」の「わ」を「は」と書き誤ったのは、語の途中のハの音がワに転じたという当時の音韻の状態を受けて、語の中のワ音は「は」と書けばよいと誤断したことによる。当時の音韻の状態と仮名づかいの意識の一端が知られる。また、平仮名で訓み方を記していることは、平安時代、すでに『万葉集』が訓みにくくなっていたことを表し、またその訓み方は、現在の研究からみると誤りもあるが、当時『万葉集』の本文がどう訓まれていたかをはっきりと示すものとして貴重である。

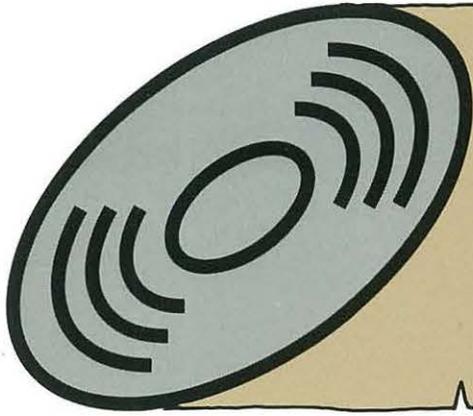
現在からみた種類別編集の意義 古歌を題材によって類別して編集することは、平安時代も早い時期から行われていた。これは、歌合せなどで、示された題にしたがって歌を詠むことが盛んであったが、そのような題詠のための手本づくりが求められたことによる。また『類聚古集』がとった分類方法は、平安初期の『新撰字鏡』『和名類聚抄』などの辞書の分類を参考にしたことが知られ、これら辞書類の影響の強さとともに、平安時代の人たちの事象のとらえ方をみることができる。また、各歌をどの種類に入れているかを通じて、



各歌に対する当時の人たちの解釈も知ることができる。

『類聚古集』の伝来 本書は、安土桃山時代の古典学者として知られる細川幽齋から、その弟子で江戸時代初期の代表的な堂上歌人の烏丸光広へ、そして明治に入って烏丸家から藤原北家花山院流の中山侯爵家へ、さらに西本願寺門主の大谷家へと伝えられ、龍谷大学図書館に譲渡されたものである。古典研究に関わりの深い人々の手を経て本学の所蔵となったことも、本書の性格を語ることになろう。
(文学部教授)





大谷探検隊 収集古紙片のCD-ROM化

岡田 至弘

龍谷大学図書館には、西域文化資料の名前で知られる膨大な量の古文書が収蔵されている。西域文化資料とは、大谷光瑞師が、20世紀初頭に探検隊を組織して収集された仏教関連の貴重な資料である。現在これらの資料は『西域考古図譜』や『西域文化研究』などにまとめられているが、原典すなわち現物を閲覧しての研究には困難が伴う。資料は、紀元前から15世紀までの古文書であり、継続的な図書館課員の努力に

より良好な保存が保たれている。しかし、将来に亘っての保存、研究活用を考える上では、従来の文書保存の枠組みではなく、新たな保存技術の開発が待たれるところである。一般的に図書館における古文書管理では、保存、分類、展示の各項において各々留意する事が必要とされる。理工学部では、古文書の管理を体系化するために、保存・分類・展示を同じ枠組みの上で行う研究に着手している。具体的には、古文書そのものの持つ情報を高精細のデジタル画像として蓄積し、蓄積された画像をデータベース化(分類)する。表示すなわち展示では、ハイビジョン画像として描画してオフセット印刷程度の品質で閲覧に供する。デジタル画像として蓄積できることからキャンパス間のネットワーク経由での利用も可能となる。現在は、文学部の小田義久先生がまとめられた大谷文書目録を元に約3000点の西域資料をデジタル画像として、入力・蓄積を完了したところである。昨今のマルチメディア技術に対応して、全データはCD-ROMに蓄積・管理している。今後は、資料そのものの持つ情報を文字情報、紙片情報に分類して新たな資料検索の枠組みを研究していくつもりである。

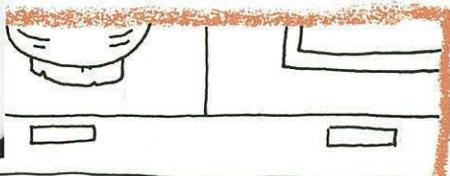
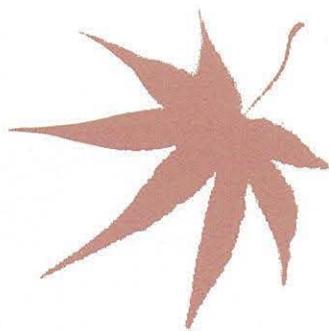
研究にあたり、西域文化資料の整理にご尽力を頂いた図書館課員の方々、資料の研究利用を許可して下さった図書館長の池田重良先生、文学部の上山大峻先生に深謝いたします。

(理工学部助教授)



新 知 故 温

(西域文化資料の画像データベース)



R君 瀬田図書館に行く!

これまでの号で龍谷大学に3つある図書館のうち深草図書館と大宮図書館を紹介してきましたが、今回は最も新しい瀬田図書館をのぞいてみたいと思います。

さて、経済学部のR君、スクールバスに乗って瀬田図書館に来たものの、深草図書館や前回は行った大宮図書館とは雰囲気が違います。見慣れたカードボックスもありませんし、ちょっと戸惑ってしまいました。そこで、入り口のすぐそばのカウンターにいたSさんに聞いてみることにしました。

R 君：瀬田図書館に初めて来たのですが、どうしたらいいんですか。

Sさん：瀬田図書館は、全面開架方式をとっていますので、深草や大宮の図書館と違って全蔵書は表に出ています。また、開設当初からコンピュータで目録管理していますので、カードボックスはありません。だから、図書や雑誌を検索する場合は(OPAC)で探してもらえばいいですよ。

R 君：深草の学生なんですが、ここでも図書を借りられますか？

Sさん：借りられますよ。深草・大宮図書館とは別に6冊借りられます。

R 君：経済学関係の図書はどこにありますか？

Sさん：瀬田図書館はフロアによって分野の配架を変えています、社会科学系の図書は1階です。自然科学や工学の理工学関係は2階です。地階にはその他の人文科学等を配架しています。そして、書架の中央の通路で和書と洋書を分けています。経済学関係の図書は1階になります。

R 君：検索端末の使い方は深草図書館と同じですか？

Sさん：全く同じです。龍谷大学の図書館は3館でデータベースを共有していま



すから深草図書館と同じ方法で検索してもらえますよ。

R 君：じゃ深草図書館から瀬田図書館にある図書を探することもできますね。

Sさん：そのとおりです。瀬田図書館に来なくても深草図書館から相互貸出を申し込んでいただければ、借りられますよ。申込用紙は旧館1Fのカウンターにあります。ただ、その場合は深草図書館の貸出制限数6冊に含まれることとなりますけれど。

R 君：雑誌の場合も同じように利用できるのですか。

Sさん：ええ、雑誌も相互利用により、深草図書館で瀬田図書館の必要な雑誌のコピーが手に入りますよ。申込用紙は新館2Fのカウンターにあります。

R 君：雑誌はどこにありますか？

Sさん：2階には理工学部と社会学部の専門雑誌を、地階にはその他の一般雑誌を配架しています。バックナンバーは2階の電動書架に自然科学系と人文社会科学系に分けて、和雑誌は書名のヨミの50音順に、洋雑誌は書名のアルファベット順に配架しています。他大学との交換雑誌は、大学名の50音順に別のところへ配架しています。

コピーされるのであれば、カード式コピー機3台が1階奥にあります。コピーカードはカウンター横の自動販売機が購買部で購入してください。

R 君：学外に文献複写を頼む場合は、深草図書館と同じですか。

Sさん：同じです。申込用紙に必要な事項を記入してカウンターに持って来てください。記入例はカウンターにありますから、それを見て記入してください。分からなければ係の者に聞いてください。

R 君：カウンター横のパソコンは何に使うのですか。

Sさん：深草図書館のリーガルベースと同じように法律判例文献情報やJ-BISC、N-BISC、NACISIS等のCD-ROMの検索に使うパソコンとNACISIS-IR、JICST/JOIS、日経テレコンBIZ等の外部情報検索に使うパソコンです。利用するときはカウンターで申込書に記入してもらえば、検索が出来るところまで図書館でアクセスしますよ。

R 君：学生が自分でも自由に使えるわけで

すね。それでは、NIFTY-ServeやPC-VANといったパソコン通信は使えますか？

Sさん：残念ながらそういったパソコン通信については今のところ使えません。ただ、その他のデータベースも含めて新規加入は考えています。

R 君：例えばNACISIS-IRではどのようなことが検索できるのですか。

Sさん：キーワードを打ちこむことによって、最近10年位の雑誌論文がどの雑誌のどの号に載っているかを網羅的に調べることができますよ。

R 君：図書館って色々できることがあるんですね。どうもありがとうございました。



以上のやりとりを読んでいただければ、瀬田図書館の概略は分かったも同然です。でも、図書館は使ってみないと分からないこともたくさんあります。図書館は本の倉庫ではありません。どんどん使いこなしてこそ図書館です。図書館スタッフも学生のみなさんの来館をてぐすね引いて待っています。では、図書館でお会いしましょう。

資格試験(公認会計士・税理士他) 受験者への図書館利用のすすめ



— From Professor

早矢仕 健 司

これからの経済社会は、いわゆるバブル経済までのような高度な成長が望まれる社会ではなくなって来ていることは、学生諸君も十分に認識していることであろう。したがってこれまでのような大学卒を大量に受け入れてくれるような経済社会ではなく、いろいろな領域で、量より質を要求される社会となっている。このような経済社会のなかで活躍しようとするものは、大学生活の中で各自がどのような質(専門的な知識)を身につけるかを真剣に考えて行かねばならない。その一つが、何らかの資格を取得することであろう。

現在、学生諸君が取得可能な資格は、司法試験、公認会計士を筆頭にその他種々のものがある。そこで深草図書館では、それらの資格試験受験に必要な問題集から資格の内容を解説した書物を揃えた[資格試験問題集コーナー]を設けている。

龍谷大学もすでに多くの資格試験取得者(司法試験、公認会計士、税理士等)を輩出し、専門職業家として社会で活躍している。これら資格取得者たちは、おそらくいわゆるダブルスクールで各専門学校にも通って勉強したものもいるであろうが、それと同時に図書館のこの[資格試験コーナー]を利用しながら勉強したことであろう。龍谷大学では1993年度卒業生から大変難しいといわれる公認会計士第2次試験に在学中に合格した学生が出ました。このように、諸君の仲間から合格者がでたことは、難関であるといわれている資格試験が努力すれば諸君の手の届く所にあることを物語る証拠である。

このような事実を各自の刺激として、折角開設されている[資格試験コーナー]を大いに利用して、この大学生活のなかで各自の大学生としての質を高める努力をしてほしいものである。そのためには、わが図書館もでき得る限りの援助・協力を惜

しむものではない。

今後、多くの資格取得者が輩出することを期待したい。
(経営学部教授)

— From Student

櫻井 裕子

大学卒業後5年間の職務経験を経て、大学院での勉強を始めた私が最初にしたことは、図書館を「見る」ことであった。大学が自分の勉強をどうサポートしてくれるかということをもっと知っておきたかったからである。国立の単科大学を卒業した私にとって、私立の総合大学の図書館は、至るところに宝が転がる「アリババの洞窟」のように思えた。学部時代は柔道の練習や友人との他愛もないおしゃべりに時間を費やし、図書館は試験前の1、2週間だけを過ごす自習室だった。宝の山があったのかどうかも知らない。しかし、もし宝があることに気づいていたならば、大学生活は大きく変わっていたのではないかとさえ思うのである。その点、本大学の図書館は親切で、例えば館内には「資格試験コーナー」が特別に設けられており、「宝はここにありますよ」と教えてくれている。それを見てはじめて、何らかの資格取得が必要であると考えた学生も少なくはないと思う。

社会に出た途端、ことあるごとに「いったい、大学で何を勉強してきたのか」と問われ、「無駄の効用ですよ、へへへ」と頭を掻くばかりであった私であるが、できることなら、資格の一つや二つを眼前にたたきつけてやりたかったと、つくづく残念に思うのである。

(経営学研究科・ビジネスコース)

龍谷大学図書館報『来^{らい}ぶらり』第11号

1994年11月発行

編集・発行 龍谷大学図書館

〒612 京都市伏見区深草塚本町67

☎075-642-1111(大代)